

故坂田道さんを偲ぶ

大磯波乗り物語



人間が素朴で自然に
なつてくるんじゃないかな

息子が言ったんだ

“人間はまず、波に乗ったか
乗ってないかで、2通りに分かれる”とね

なるほど、と僕も思ったよ。

ボード一枚で海に出て、
崩れ落ちる波に乗る。

それは大自然との対話であり、
自然との一体感を得られる瞬間でもある。

だから波に乗った人間は、
本来人間が持っている原始的な感覚を
呼び起こされるというか

つまり人間が素朴で、
自然になつてくるんじゃないかな

そう語ったのは日本で初めて本格的なボードを自作し、
一昨年74歳で亡くなられるまで日本サーフィン連盟で
理事長を15年間、相談役を17年勤めた坂田道さん。
この大磯北浜海岸をサーフィンの拠点とし、
日本の近代サーフィンの父と呼ばれるレジェンドでした。

波乗り伝説は手作りで始まった



昭和20年。「この波に、立って、乗れば」と
夢想する少年がいた。少年が、他と違っていたのは、
夢を夢で終わらせなかったことだった。

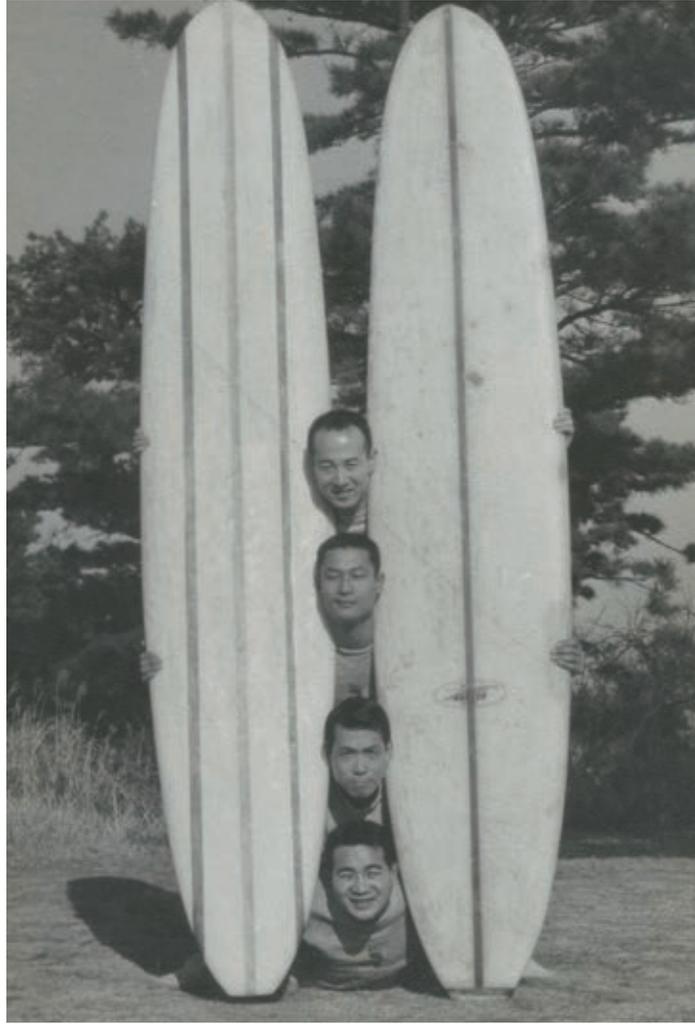
坂田さんが少年の頃、ボードはなく簡単な木の板で
腹ばいに波に乗る板子乗り。そんななかで米軍基地から
大磯へ来ていた外国人の「サーフィン」をみて衝撃を受ける。
資料を探し図書館で「サーフボード」の構造を解説した
和訳された本と出会うことから坂田さんは日本で初めて
本格的なサーフボードの自作に至る。

それは、ウレタンフォームをグラスファイバーで巻き、
フィンがついた、現代のサーフボードと変わらぬものだった
ならばと自作に挑戦するも難しい木材加工に、特殊な素材の
ポリエステル樹脂にグラスファイバー。

ようやく完成した「一号艇」。長さ300cm、幅55cm。

いざ大磯の海岸にもちだしてみるも簡単には立てなかった。

時に坂田さん27歳。昭和38年。東京オリンピックの前年だった。



仲間達とサーフィン連盟を設立

とうしょ かいいん めい いま ぜんこく にん
当初の会員 50 名が今や全国 10000 人

100 万を越えるといわれる日本のサーファー人口。
坂田さんがサーフィンを始めた頃はわずか 50 人ほどだった。
その影には会社勤めの傍らサーフィン連盟の運営に奔走し
サーフィンに情熱を傾けた坂田さんの大きな努力があった。
この大磯をサーフィンの拠点とし、仲間達と
「大磯 BIG WEBERS」を結成し、昭和 40 年には、日本
サーフィン連盟 (NSA) の立ち上げに尽力。理事長を 15 年
相談役を 17 年勤め、全国各地にサーフィンを広め長年に
わたり日本のアマチュアサーフィンを支えてこられました。
今ではあたり前のボードの電車内の持ち込みも、坂田さん
を初めとする日本サーフィン連盟の働きです。

年齢なんて関係ない

年齢なりに場所を選び、波を選ぶ
筋肉は使っていれば落ちないもんだ
体力なんか、好きでやっているうちどうしてくる
波に乗るのは男の誇り
少しずつでも、ずっと続けるのが良い

そう言つて最後の最後まで波に乗った
坂田さんでした。

いつまでも楽しむことが真ん中にあった

坂田さんはサーフィン以外でも、海に関わる活動に力を入れてきました。漁業関係者やライフセーバー、ビーチクリーン、アウトリガーカヌー、サーフィンなどの団体が話し合う「大磯海の会議」を発足。代表者として、いそっこ海の教室や自然環境の保護に力を尽くされました。少年のころから大磯の海と向き合い楽しんできた坂田さん。いそっこ海の教室も当初から子供達に自然と向き合い楽しむことを教えて下さいました。何歳になっても自分に限界をつくらない。そんな格好いい背中を見せ続けてくれる坂田さん本当に有り難うございました。



いそっこ海の教室
での坂田さん